上ヲロウ・下ヲロウ遺跡（本発掘調査B）

調査地点（1/2.5万「田口」）

所在地　北設楽郡設楽町川向地内
（北緯35度06分51秒 東経137度34分05秒）

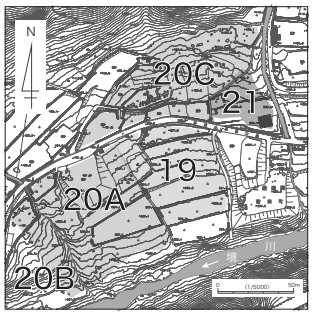
調査理由　設楽ダム

調査期間　令和3年5月～7月

調査面積　1,020㎡

担当者　樋上 昇・川添和暁・酒井俊彦

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局による設楽ダムに伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。調査区は、県道432号小松田口線の北側、昨年度調査区20C区に接して遺跡範囲の東端に1,020㎡で設定された。



調査区位置図

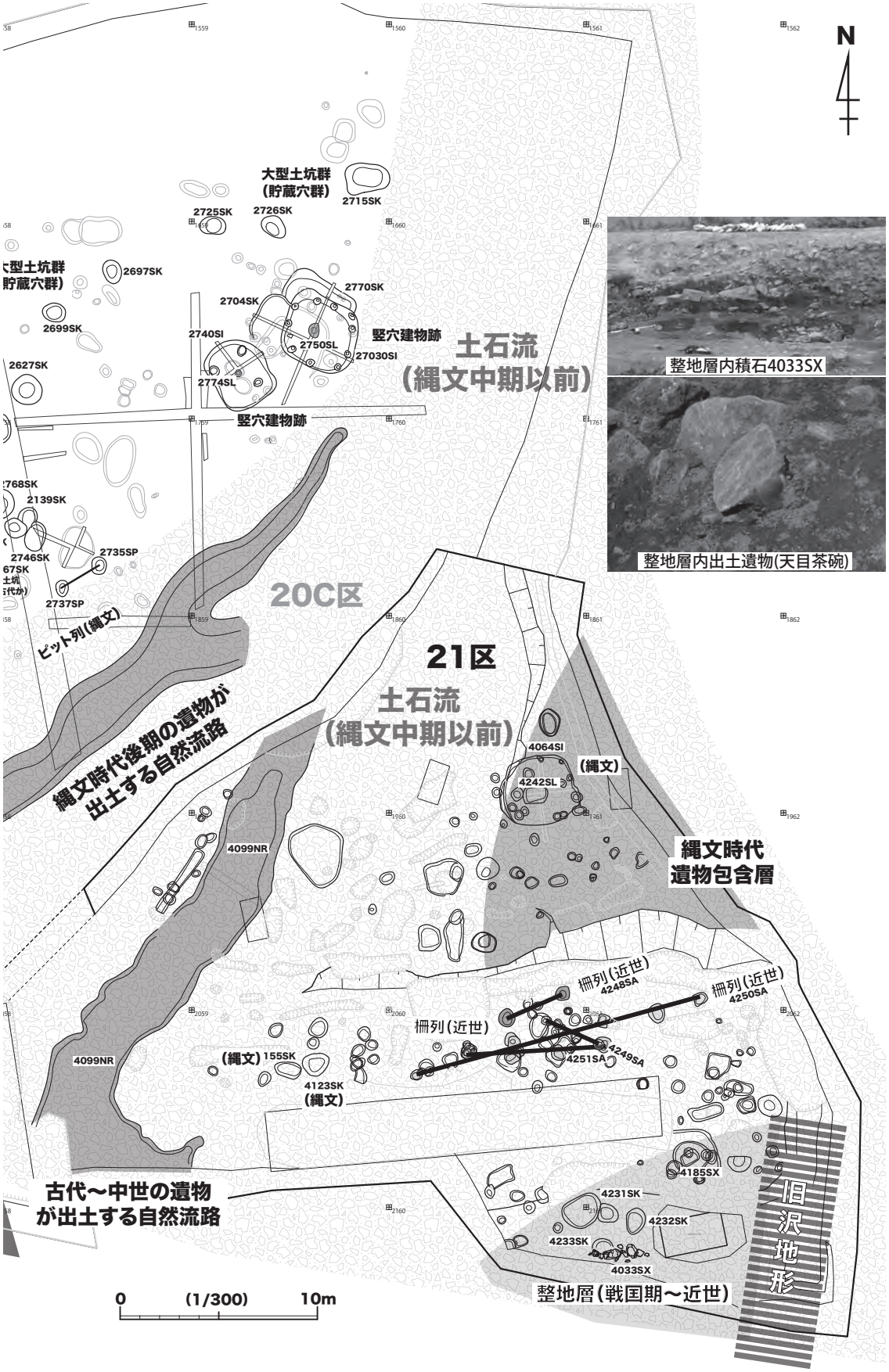
立地と環境　遺跡は、境川北岸の緩斜面上に立地する。当地には、斜面上方北側から幾筋もの沢が流れ込んで来ており、緩斜面は度重なる扇状地堆積(土石流堆積)の累積によって形成されている。今年度調査区の調査前の標高は、400～410mを測る。

調査の概要　基本層序は、上から、第1層：表土および近代以降の盛土・耕作土、第２層：古代から近世の包含層および耕作土(灰褐色および黒褐色あるいは黒色シルトもしくは粘土層)、第３層：縄文時代中期～弥生時代中期の遺物包含層(黒色粘土層および褐色粘土層)、第４層：無遺物層(明黄褐色礫層)、である。第４層は縄文時代前期以前に形成された堆積層で、これより以下からは遺構・遺物を確認することができなかった。当遺跡では、この第４層が堆積そして安定化してはじめてヒトの安定的な活動が行われたものと考えられるが、20C区・21区の境付近で本層が馬の背に高くなっており、さらに南側県道に向かって地形が傾斜するに従って、第２層・第３層の堆積および遺構・遺物の存在が確認された。

縄文時代　調査前の調査区は、北東側高位の緩斜面部と南東側低位の平坦部、さらに西側緩傾斜部に分けられ、各部分で確認された主たる時期が異なっていた。縄文時代の遺構は、北東側高位の緩斜面部を中心に第３層が広がっており、竪穴建物跡(4064SI)が検出された。また西側緩傾斜部では土坑２基も見つかった。出土遺物は深鉢細片のみであり、帰属時期は後期と考えられる。

古代・中世　古代～中世前半の遺物は、西側緩傾斜部で見つかった自然流路内(4099NR)からまとまって出土した。出土遺物には、灰釉陶器椀・壺や山茶碗などがある。

戦国期～近世　今回の調査で最もまとまって調査された遺構・遺物は、戦国期～近世にかけてであり、南東側低位の平坦部に集中していた。平坦部では当該時期の土坑・柵列や炉跡の可能性もある集石遺構(4185SX)のほか、南側の斜面下方に向かって炭化物や陶器片を多量に含む整地層が確認されたことから、この平坦面の造成が戦国期に遡るものであることが確認された。設楽町内では、近世後半から近代以降にかけて宅地などの所在していた場所は、戦後から昭和50年代にかけて大きな造成が行われている場合が多い。本調査区では、西地・東地遺跡の調査以来、戦国期に遡る集落跡の一端が確認・調査された極めて貴重な事例となったといえる。出土遺物には天目茶碗・擂鉢・内耳鍋・砥石などがある。　(川添和暁)



調査区全体図（S=1/300）